

浄土

十月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月一日（第一回）発行
昭和二十四年四月二十八日（第二回）発行
昭和四十二年九月二十五日（第三回）発行
昭和四十二年十月一日（第四回）発行

第三十三卷 第十号



直心存

直節

日野西徳明尼

竹ほど東洋情緒をかもし出すものは少ない。其為か、ここ近年造園造庭にさかんに用いられている。私は早くから、竹が大好きだったのでこれもよい傾向とよろこんでいる。スーッと一直線に伸びる幹の鮮やかな緑色をみてみると、もろもろの欲の為に簡樸もなく有往左注している人間に、直心に立ちかえれ、と呼びかけてくれている様に見える。此心を写そうとするがこちらの心が直心でないから思うように画かれない。

— 目 次 —

表紙「彼岸花」松濤達文画

お 十 夜

..... 宮林昭彦…(2)

奇縁と仏縁

..... 岡部秀樹…(4)

名士訪問 日野西徳明尼(6)

心

..... 合田微雪…(6)

四苦八苦② 宿業の生

..... 渋谷賢応(10)

お茶をおいしく⑩ 麻腐

..... 三浦純亭…(12)

和訳三部経① 凡夫のために説く

..... 村瀬秀雄…(14)

新興教団探訪⑤ 原理運動

..... 藤井正雄…(18)

歴史夜話⑥ ムダの多い爆撃

..... 玉山成元…(22)

浄土宗のおしえ⑧ 浮土三部経について

..... 丸山博正…(24)

御歌をいただく(27)

連続
絵話 みんなの法然さま・紫雲たなびく

..... 高橋良和…(28)

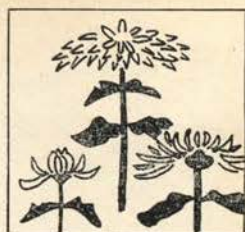
キャンプの朝

..... 岡本圭示…(31)

あ
み
だ
仏^{ぶつ}にそむる心のいろにでば
秋
あ
き
の
こ
ず
ゑ
の
た
ぐ
ひ
な
ら
ま
し

法然上人御歌





お十夜

宮 林 昭 彦

虫の声が聞えてくる。暑い夏も過ぎて、爽やかな秋を迎える頃になると、いろいろの秋の行事がはじまる。

浄土宗のお寺でおこなわれる秋におつとめする行事としては、「お十夜」がある。

お十夜の行事も、ところによって必ずしも一様ではない。郷土色ゆたかな、民間伝承の芸能をまじえて催されるものもあれば、古式そのままに伝承した、引声念仏、双盤念仏によって、厳肅な念仏行事を催するものもある。

また、諷誦回向や、塔婆回向を中心とするものなどもあり、その地方ごとによって、種々さまざまな儀式儀礼がおこなわれている。

そもそも、お十夜は、十日十夜とよぶのが、ほんとうの名称であるが、普通には略して、お十夜といわれている。

浄土宗の大切なよりどころの經典である。無量寿經下巻に「ここにおいて善を修すること十日十夜すれば、他方諸仏の国土において、善をなすこと千歳なるに勝る」と説かれている。また、阿彌陀鼓音声王陀羅尼經には、

「もし、かの仏の名号を受持するものあり、その心を堅固にして憶念して忘れず、十日十夜、散乱を除きすて、精勤して念仏三昧を修習し、かの如来の常恆に安樂世界に住したまうことを知り、憶念相統して、断絶せしむることなく、この鼓音声王大陀羅尼を受持の誦誦し、十日十夜六時に念を専らにし、五体を地に投じて、かの仏を礼敬し、堅固正念にし、悉く散乱を除き、もしよく心をして、念々に絶えざらし

めば、十日の中に必ずかの阿弥仏を見、並に十方世界の如来
および所住の処を見ることを得ん」

とあることに由来する。

かように、十日十夜、一心不乱に「なむあみだぶつを称え
つづけることによつて、如来さまのおかげのなかに生かされ
ていることを自覚し、安らぎのなかに生活をたのしむことが
できる、というのである。



もろもろの愚者も月さす十夜かな

おもえば、わたしたちは凡夫である。ともすれば、自己中
心のわがままな立場にたつて、我見にとらわれ、我慢、我
愛、我執にとらわれてくるから、不平や不満の連続となり、
とりこし苦労がつきない。そのため、たえず不安や憂慮にさ
いなまされながら生きているのである。

人を傷つけずに生きよう。人をうらまずに生活しよう。善
いと思うことは、ただちに実行しよう。悪いことはあらため
よう。日常の生活においても、人間はよりよく生きるため
に、色々の知恵をめぐるものであるが、しかし、ままならぬ
ものである。精一杯生きていると思つても、いくたびか人生

の壁にぶつかり、絶望と孤独さに涙することも、しばしばで
ある。

やはり、わたしたち人間は凡夫である。愚者である。たと
え世間的な学問や名声を得たとしても、絶対である真理や如
来さまの前には愚者である。自分一人の力で生きているとい
う傲慢さがあるかぎり、人間は愚かものというべきであらう。
生きているのではない。生かされているのである、という

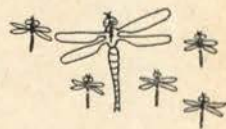
自覚がおこったとき、感謝と報恩の生活がはじまるのである。
人間の心の底には、減することのない暗さがあり、醜さ
がある。反面、減することのない光りがあり、美しさがある、
ということも事実である。人間の世界には、多すぎるほどの
不合理や、悪や、陰謀があり、打算がある。それは、ほかの
動物には、みられない醜さである。

けれども、同時に、人間の世界には愛がある。人のため
に、自分の肉体を犠牲にしても奉仕しようという献身的な行
為をすることができ。これは、人間のみのもちうる美しさ
であらう。

お念仏は、人間のもっている美しき面を引き出してくれ
る。生きるよろこびを感じさせてくれる。それは如来さまの
み光につつまれるからである。お十夜は、まことの人間性を
育てる、大切な行事である。

奇縁と仏縁

岡 部 秀 樹



最近、経験した話である。

横浜の伊勢佐木町で鮑店を営んでいる松野きんのお宅でおこったことである。話はさかのぼるが、昭和十八年のこと、前年父親が亡くなり、家庭の杖とも柱とも頼のむ長男の伊佐太君が、学徒出陣で出征した。当時、関東学院大学専門部の学生であった彼が、仮卒業というかたちで、一カ年程内地で訓練をうけ、ヒリッピンに派遣された。その頃、戦火も漸く熾烈をきわめ、各地で壮烈な激戦が展開され、日本の敗色いよいよ濃くなった、昭和二十年二月、彼は、二十二才の夢多き青春は、ルソンの戦場の露と消えたのであった。

母親のもとえは、遺品は何一つもどらず、一年余すぎてから、名前が認められた位牌だけはいっている遺骨が帰って

きた。母親は、遺骨を胸にいだきしめながらも、半信半疑であった。

あれから廿二年の歳月がながれた。終戦前後の物心両面にわたる生活の苦しさ、すぎこしし今日までのきびしい人生をふりかえり、いまは成長した五人の子供らの姿をみて、幸せをかみしめながらも、戦死した長男のことが片ときも忘れることはできなかった。かかしたことのない仏壇のお灯お線香のかおりの中に、泌々と今日も長男の面影を偲ぶのであった。

ところが、今年の六月のある日のこと、朝けたたましくなる電話に、「お母さんテレビをみて！」という声が、突然耳にとびこんできた。「弟の旗がうつっている……」。よく理解できないままテレビのチャンネルをあわせてみると、画面いっぱい、日の丸の旗がうつっている。よくみると、まぎれもなく、わが子が身につけていった旗である。多少文字はうすくなっているが、祈武運長久、為松野伊佐太君の墨の文字をはっきりとみふた。一瞬、おどろきと不安との様々な感情が、体をかすめたが、すぐさま放送局へ連絡して、数日後スタジオで、その旗をうけとったのである。

片時も忘れたことのない戦死したわが子の旗が、家族にも
どるまでの経過は、こうである。

アメリカの小さな都会に住む、ピータソンは最近よく夢を
みる。それも廿余年も前の戦場での夢である。日本軍に追わ
れたり、また、日本兵がなにか求めるすがたで、自分をみつ
めているのである。連日悪夢にうなされて、ゆっくり休むこ
とができない。今更、なぜこんな夢をみるのだろうと不思議
に思ったが、フト、二十二年前、ヒリッピンの激戦地で重な
り合って死んでいる日本兵の間に、しっかりと日の丸の旗を
胴体にまきつけて死んでいる青年の姿が目についた。夢中
で、その日の丸の旗を、はぎとった。やがて戦争終結して、
アメリカに帰国したが、彼れは、血痕をクリーニングして記
念品としてしまつて置いたという。

きつと、あの旗のせいかもしれない。

彼れは、早速日本からきていた女子留学生に託して、旗の
持主の家族を探しもとめるよう依頼したのである。その留學
生は愛媛県の出身者で、帰国後、愛媛の新聞に報じたが、わ
からず、その後、木島則夫・ショウに紹介されて、家族のもと
に、廿三年ぶりに帰ってきたのである。



初秋の一日、同級生や恩師が集り、追悼会をおこなった。

銃丸のあととなまなましい日の丸の旗をみながら、青春の血を
たぎらせた若き日を偲んで、ともども感慨をあらたにしたの
である。

母親は、涙をうかべながら

「今までよもやどこかにという、あわい祈りにも似たのぞ
みをもっていたのですが、これで倅の死も確認されたわけ
です。あらためて淋しい気持ちに致します。しかし、倅は、わ
たしのところへ帰ってきてくれたのですね。仏さまとなって
あらわれてくれたのです。お念仏の功德というものでしょう
か。これから、帰ってきてくれた息子とゆっくり語り合いま
すよ」

といって、ひれふすのであった。



このことを、人は偶然というかもしれない。しかし、年老
いた母親は、因縁とうけとるのであった。なんでもない出来
事であっても、そこに見えざる糸を感じとるのである。

お念仏は、むずかしい理屈をこえて、まことの人間の在り
方を気づかせてくれる。

生きているもの同士が対話すると共に、亡くなった人との
対話がなされて、はじめて、人間のいのちを理解することが
できるのである。



変った尼衆学校

市電の左門前で下車して、知恩院へなだらかな坂道を行くと、右手に勢至丸様の銅像があり、左手には華頂学園の短大や高校中学がその威容を誇っている。さらにもう少し登って行くと、右手のはずれに吉水学園高等学校がある。

かつてここには「尼衆学校」という看板がかかげられ、記者などが学生のころは、多くの尼僧が黒染の改良服で出入してい

(名) (士) (訪) (問)

吉水学園

校長事務取扱

日野西徳明尼

た。時には白の運動着などきて、甲斐々々しく掃除などしていた。尼衆学校は、そうした特異な存在として、天下に名を知られていたが、時の流れは、いつしか吉水学園高等学校とその名を改め、内容も大分変ってきた。

「いまだれ位の生徒さんが」

「そうですね、普通科と専修科で十九名です」

「専修科といえます」

「普通科をでまして、更に二年程勉強します」

清掃された応接間で、静かないききした

口調で受け答えされるこの尼僧は、いま校長事務取り扱いをしておられる日野西尼である。且つて記者が仏教専門学校に在学していたころの一年先輩で隣の教室であった。

「あの頃、隣の部屋から尼僧の美しい声など声えてきますと、シーンとしたものです」

「そうですか」

尼僧は、そこで大きく笑われた。それにしても、随分変わったものである。一般高校生に英数国漢や、生物化学をやる尼衆学校の変容は、時代の動きをよく示している。

「新しい時代に、若い日野西尼を迎えて、吉水学園も大いに発展します」

丁度、来合わせておられた野中学事部長はそのように解説された。

父の善提を弔う

「尼僧となられた動機は」

記者は単刀直入にぶしつけな質問をし

た。

「父が亡くなりましたして、その菩提を弔うためでした」

極めて淡々と答えられて、いささかホッとした。と角、こうした問題は、記者の方がこだわりすぎているようである。

「八才の時に寺に入り、十五才で得度いたしました。日野西徳宝尼の養女となった次第です」

日野西徳宝尼は、先々代の尼衆学校長であり、且つは善光寺副住職もつとめた方であった。その後、寺森救山尼が校長となられ、その歿後を、現在の日野西尼が受け継がれ、事務代理として、校務を処理しておられるわけである。

「なにせ、生徒数は少いし、授業は数にかかわらずやらなりませんし、大変ですわ。宗務にも随分迷惑かけています」



そう言われて、隣の野中部長は頭をかいていた。

現在は奈良の興福院の住職であり、毎日奈良から通っておられるわけである。

「秀吉の頃からあった寺で、筒井順慶の一族が建てた寺でして、始めは豪族の娘が住職でしたが、五代目から公卿の娘が住職をしています」

日野西尼もそういうわけで、華族の出であり、現在十一代目に当るそうである。

少くなくなった尼僧

「生徒さんが少ないのは、やはり時代の流れで」

「そうですね。この頃は尼さんになる人も少ないです。私達としては残念ですね」

「やはり、自由を求めてでもないことですか」

「そりゃいろいろありますでしょうね」

いまここに学んでいる尼僧を、経歴別に分けてみると、生れて間もなく尼寺にもらわれ

て行った人が約三分の一、小さい時に、尼寺に入った人が約三分の一、自分で発心して尼になった人約三分の一という配分だそうである。

「この様な時代ですから、やはり気が変わって還俗する人もありますか」

「今までの所ありません。又切角こうした世界に入られた以上、尊いことですから、そうしたことの無い様に、教育者も心掛けております」

「日野西さん自からはどうですか」

随分失礼な言い方が質問してみた。
「全然そんな気ありません。第一、そんな気の起るような環境で育っていませんので、今更何がきても平気です」

「然し、若し、そうした環境に入れられたら、いかがですか」

「そうですね、私は仏教専門学校時代男



子の方達と机を並べておりましたので、これは大変よい勉強になりました。今、本当に感謝しております。それにしてもそうした環境にいても平気でしたから、本来的に、そうしたものに反応する能力がありまんのやろ」

「私には一つです。第一、仏を信じておれば、精神生活も物質生活も保証されています。道心のあるところ衣食ありと申します、その通りです。男性には、それ程保証してくれぬ人もあります」

普通の女性として生活すべきだと思っております。尼僧の世界は厳しくあらねばなりません。有髪の尼などという妥協には、私は賛成いたしません」

そう言つて、声を立てて、笑われた。

もうここに至つては、頭を下げざるを得ない。それでもあえて、聞いてみた。

仏と結婚していただきますので

「若しですよ。若し理想の男性があらわれたらどうします」

「それでも、人間である以上、例えば恋愛というようなことは、あつても不思議ではないのではないですか」

「み仏以上の男性があらわれた時に、改めて考えてみますわ」

「そりゃ、そうでしょう。しかし、私はみ仏と結婚しておりますので、外に男性などいません」

もうこれ以上聞く必要はない。仏にさえない男性が、仏以上になる事など、雲の上の事である。

「生徒さんにもそうした教育を」

「いいえ、これは勿論私自身のことです。すべて人間を同様に律し得られません。人間ですからあやまちもあります。しかし、それがあやまちと分れば、禍を転じて福と

してもらいたいと思ひます。しかし、どうしてもそれができない時は、還俗しても、

「仏を信ずる事と、人間同志の愛とは別ではないですか」

「生徒さんにもそうした教育を」

思い出話しに花を咲かせながらも、そして、柔かいタッチでの会話ではあるが、そこには太いバックボーンが通つていた。このバックボーンがある限り、吉水学園の教育は大丈夫であるという感を深くして、記者は掃き清められた庭を眺めていた。

(安居香山)



雪 微 田 合

かくれた月

ある夜散歩の道すがら、兄妹仲良く机を並べて勉強している明るい窓を発見し、邪魔をしてはと躊躇しながら軽く声をかけた。

答える態度が立派であった。室内もキッチンと整理されているし、壁にかかげられた数々の賞状がその子供さんの学校成績の優秀なことで、また図画などの上手なことを物語っていた。

数日おいて、何か参考になりそうな本や画

集を手元に再び訪ねてみた。

ところが、その家は跡形もなく取りこわされ、住んでいた家族は行方不明という。そして父親はすでに数年前交通事故で亡くなっていることなど、近所の人から聞かされた。

あんな良い子に育てたお母さんなら、きっと立派な婦人にもちがいない。詳細はわからなかが如何してこんな処理をとらねばならなかったのだろうか。それにしても何故あの翌日も訪れなかったか。相談に乗って上げられることもあったかも知れぬのに。

私はこの時、己が不誠意の悔をつくづく思い知らされた。

霜の朝

戦前はカネを拾って届けるのは当然の事で、別に問題とされなかった。が、戦後は同じことをして美談などと仰々しく大新聞にまで書きたてられる。悲しい世になったもので

ある。

けれど「小さな親切」表彰運動はうれしい。というのはその小さな親切こそ、小さな愛情からでは決して出来ない行為だからだ。朝、門外の新聞受けに差し込んである他社の朝刊を、自分の新聞と一緒にわざわざ玄関まで配達してくれる新聞少年がある。

早朝なので、誰もこの少年の厚意に気がつかない。この少年は誰にも知られない善行に己が労力を惜しまない。受ける方はただ嬉しただけだが、与える方の苦勞はどんなであらう。

世人はまだ夢のさなか、未明の眠さをけつて起きあがり一抱えもある新聞の配達を済ませ、早々に朝飯をかき込み、始業に遅れぬよう登校しなければならぬ。遊び盛りの身で、日暮れ時もう一度同じ事を繰り返す。学業にも予習復習があることだろうに。

この年少時のアルバイトの辛さを、自分が老年になってからも時々夢にみるという。若しや間違った配達をしはせぬかとヒヤヒヤした遠い日の思い出の夢を。



四 苦 八 苦 — その二

宿 業 の 生 (生)

渋谷 賢 応

「生」を語原によれば「生れる」ことであり「生苦」とは人が生れるその時の苦痛を言うものであることです。しかしながら、仏典に出てまいります「生」は必ずしもそのことに限られていません。生の因は有であり、有の因は受であり、受の因は愛であるなどとその根底を挟り、欲愛、色愛、無色愛などと、生の根源を遡っています。

これを漢語に当てた「生」はまた広義にあつかわれています。生活、衆生、生きる、生かす、生れる、生む、生そば、生卵、生い茂げる、生える、等々、くわしく語源を確かめれば二十数種の読み方があると

さえ言われています。これらがすべて「生」を意味するとは考えられない所です。「生の苦しみ」とは、一体何を指摘せられたものでしょうか。一般に考えられますように、「生きることの苦しみ」「生活苦」を言うものなのでしょうか。

中阿含經九十七の大因縁と申す中に、次のような興味深い法説が演べられています。

「アーナンダよ、よくお聞きなさい。生れると言うことによつて老死のまよいがあるのですよ。魚が魚種に生れ、鳥が鳥類に生れ、蚊が昆虫に生れ、竜が竜種に生れ、神聖なものがその中に生れ、悪鬼が鬼として生れ、天人が天上界に生れ、人が人種に生れ

る。その種に生まれると言うことにすでに老死のまよいがあるのですよ。アーナンダよ、よくお聞きなさい。このようにすべての生物がそうであるように、人もまた人種を分け、互に相争います。まず自分の利を求め、分に染著し、饕餮の心を起し、家を守ります。家を守ることによつて、杖をとり、刀をとり、喧嘩、口論、評論、争闘、両舌、妄語等、限らない悪不善の相が起つてくるのです。

アーナンダよ、よくお聞きなさい。この家の因、家の習、家の本、家の縁は、饕餮なるが故に起るのです。言いかえれば、饕餮貪なるが故に家があるのです。家には、妻

子、召使、親戚、田地、家屋、店舗、財物、等があります。これらすべてが慳貪の因となっているのです。」

このような説法をお聞きしておりますと、お釈迦さまがその在世当時、一小国釈迦族の王子として大國の間に生まれ、世の無常をはかんで出家せられるにいたったご心労が、身近かなものとして理解せられるように思われるのです。

「生れる」と言うことは自律的ではありません。あくまで他律的なことです。戦後、ベビーブームの時の子等が「どうしてこのような時に産んでくれたのか」と親を恨む声のあることを聞きましたが、その通りでして、「たのみ」もしないのに「生まれた」のです。しかもそれが一つの限られた環境の中に。ただ生れることだけでしたら苦でも楽でもないでしょうが、生物の一種族として人間に生れ、人間の中の一國に生れ、一國の中の一家に生れると言うことに「生」の苦しみがあるのです。つまり「生れる」と言うことは、広い世界に生れ

るのではなくて、最も狭い、慳貪の巢窟、家に生れるのです。したがって「生れる」そのときから、慳貪の枷に繋がれていると申さねばなりません。

人は我が身を自由であると信じています。封建社会ならばいざ知らず、この自由主義社会に生れ出て不自由なはずはないと思っています。今更こと新しく、自由、不自由をあげつらうことの愚かさや笑うかも知れません。

しかしながら、ある環境に生れると言うことの先天的決定は、これをいかんともし難いものとしてしまっているのです。人種においても性別においても、人はそれを選択する自由をはじめから失っています。いつの世においても、人は意外に不自由なものです。それなるが故に、米國における黒人の争い、ベトナムの争い、中近東の争い等々、血で血を流うような争いが、理屈では解決できない宿命的な姿においてくりかえされ尽きる所を知らないのです。私たちの人生においても、その家に生れることによって決定づけられた苦の因が、自分の分を利用するために慳貪となり、

妻子、田畑、財物等に染着して止まる所を知らないのです。

お釈迦さまはつづけられます。

「諸の弟子たちよ、よくお聞き、人もしこの苦より解脱して、染まず、着せず、断じ捨て、吐き尽くし、欲なく滅し、その想を止没すれば、これを生苦の滅と言うのですよ。」

先天的決定づけたる「生苦」は、むしろ人間の宿業のいたす所とも言ひ得るでしょう。これよりの離脱は、その想を止没するより外ないものと説かれています。

宿業よりの離脱は人智を絶します。凡夫人知の遠く及ばざる所、その想を止没するためには他力の一門より他ございません。人知を越えた広い視野に立ち、自分を越え家を越え、人種を越え、国を越えて、無限に広い世界に生きるためには、浄土の法門より他はないのです。

正念の一声一声に、生苦を滅する願をこめて申したいものでございます。

お茶をおいしく

—その10—

黄檗幽茗流家元

三浦純亭

茶 席



普茶料理は、四人一卓として一つの器具からいただきますのが普茶の特徴でございますが、茶袱台が一般家庭に入りましたのは、普茶形式がもたらしたものでございます。また、普茶料理とは内容と形式が伴ってはじめに普茶料理と申します。要するに身分の上下にかかわらず、人間凡て仏子、人間凡て根本に於いて平等だという精神の元になごやかなふんいきで食事する。その精神が失なわれましたら普茶の意味がなくなります。

御参考までに普茶の器具について御話し申し上げて見ましよう。質素と枯淡を本旨とする禪寺では、左記のようなものを使用致しますが、あり合せの道具でもよろしゅうございませう。

一、机（浄机、テーブル）長さ三尺八寸、幅一尺三寸、高さ九寸

一、大皿 箒薬用（日本のおにしめ）径八寸位

一、大皿 油餠（付揚用）揚物 径四寸

一、中皿 生盛用（果物）径五寸五分

一、中皿 醃菜用（漬物）径四寸

一、井 雲片用（日本料理のあんかけ）径四寸五分

一、井 澄子（寿目）用または味噌煮用 径四寸

一、薄鉢 浸物用 径四寸

一、薄鉢 酢物用 径四寸

一、小皿 受け皿 径三寸

一、茶碗 普通のもの

一、行堂 お櫃と汁器をかねる

一、湯瓢 汁を掬うもの

今日は普茶料理の代表の一つ 蕪腐（黄檗豆腐）の作り方を
お知らせ致します。

材料（十人前）

白胡麻 一合 吉野葛 一合

酒 五勺 白砂糖 大さじ三杯

わさび 小一本 水 三合

作り方

一、先ず胡麻をいります。いり具合は、三粒位ピチピチとは
ねた程度がよろしゅうございます。あまりいり過ぎますと
色は白くあがりません。香りもきつくなります。

二、いり上りました胡麻をすりばちですりつぶします。一
合を一時間位かけてすります。普茶の中で一番手数がわか
りますが、かかるからと申して、前日にするのは風味がな
くなります。すり上がり加減はドロドロになるほどよろし
うございます。（暖かいうちがよくすれます。）

三、三合の水でかすだけ取り除きます。一度に水を三合使わ
ずに、一合入れてはこし、一合入れてはこします。（こし器
は裏こしという目の細かいものがよろしゅうございます。）
四、こしたものを五合か一升入りの鍋に移します。そしてそ
こへ葛を混ぜます。胡麻汁と葛を混ぜる時は素手で混ぜ合
わせます。

五、その中に砂糖を大さじ三杯入れ、それをとろ火にかけ
て、すりこぎでかくらんします。

六、すりこぎを引き揚げてたらんとついできますくらいが、
出来上がりの丁度よい加減でございます。所要時間は約三
十分位はかかります。

注意 このとき、あらかじめ水とお酒を用意しておきま
す。かたさを加減するため、三合の水に間違ひなくとも
葛の性質によってかたさ、軟らかさが大分違います。お
酒は絶対に最後に入れて、つくり上げます。

七、充分練れてあめ色になりましたら、五合入りのニューム
の流し箱に入れさまします。

八、出来上がりましたら好みに応じ切ります。

味わい方

小皿にとり、わさびを添えていただきます。蕪腐のどを
越えてからの風味を味わうべきであります。

和訳三部経

観無量寿経(一)



凡夫のために説く

村瀬秀雄

一、王宮の悲劇

仏、観無量寿経を説きたまう。

私(阿難)はこのような教えを聞いた。

ある時、釈尊は王舎城の東北に聳える靈鷲山におられた。お側には千二百五十人のお弟子と三万二千人の菩薩が一緒にいた。中でも文殊菩薩が一番の上席であった。

その頃の王舎城には阿闍世という皇太子がいて、悪人の提婆達多に唆かされて、父王を弑し王位を奪うという反逆心を起すことになった。そこで彼は父の頻婆娑羅王を捕えて七重に囲まれた一室に幽閉するのであった。その上家臣たちに厳命し、何人も父に近ずかせないようにした。さて王妃の韋提希夫人は国王を深く敬愛していたので、王の生命を救う方法がないものかと心を砕くのであった。

1 阿闍世(あじやせ) 父王を弑し王位を奪い、覇権を中印度に振う。後に仏教に帰依し、教団のための大施主となる。

2 提婆達多(だいばだつた) 釈尊の従兄弟、仏弟子となつたが釈尊の信望を妬み、阿闍世を国王に、自分は釈尊に代らうとする。

後に改悛したが教団を離れ病死する。

3 頻婆娑羅王(びんばしやら王) 釈尊に帰依し竹林精舎を建てて、世継ぎを欲するの余り仙人を殺す。その時仙人の呪いをうけ、「王子が父王を殺すであろう」と予言される。そのため王子が誕生すると、王子を高所から落すが、王子は指を折つただけで生命に別条がなかった。

4 韋提希(いだいけ) 釈尊は夫人のためにこの経典を説いた。

ようやく夫人は一計を案じた。まず自分の身体を洗い清め、身体に牛乳と蜜を塗り、その上に乾飯の粉末をつけて国王を見舞うことであつた。夫人はその通りに用意をし、衣服で判らぬように覆いかくし、更に身を飾る環珞の中には葡萄酒を入れ、ひそかに国王の許に行った。こうして国王は乾飯を食し、葡萄酒を飲むことができた。やがて国王は食事を終り、口を漱ぎ清め、遙かに靈鷲山の方に向つて合掌し、釈尊を礼拝してからいった。

「釈尊よ、私はこれまで目連尊者と親交があり、たびたび尊者の教えを受けてきた。願わくは慈悲を以て、目連尊者をお遣わし下され

「私に八戒を授けさせて戴きたい。」

国王がこういうと、目連尊者は鷹や隼が飛ぶよりもっと速く、宮中から王宮に入り、国王を訪れるのであった。目連尊者は毎日国王の許にきて八戒を授けたが、更に釈尊は富楼那尊者を使者としてお遣わしになり、国王に仏法を説き聞かせた。

「八戒は不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒、不坐高广大床戒、不著花鬘瓔珞戒、不習歌舞戲樂戒の八つ。」

やがて三週間が経過したが、国王は毎日夫人の捧げる食事をとることができ、その上仏法を聞いていたので、少しも衰弱することがなかったし、顔色が和やかであった。

阿闍世は門番を呼んでたずねた。

「父王の様子はどんなであるか」

門番は国母夫人が国王を見舞って食事を捧げていること、目連尊者と富楼那尊者が仏法を説いていること、そして国王は少しも衰えずに元気で暮していること等を報告してから恐る恐る釈明していった。

「何しろお一人は国母夫人であるし、他方は宮中から訪れてくるので、私如きものには制

止したくも、できないことである」

これを聞いた阿闍世は大いに怒った。彼は国王が死なずにいるのは母のためであり、国王が元気でいるのは二人の尊者のためであることが判り、たちまち怒号していった。

「わが母は賊である。二人の沙門は悪人である。何故ならわが敵である父王を助けたのであるから、母も父王と同じくわが賊である。また沙門たちは幻術によつて王宮に入り、仏法を説くから悪人である。母と沙門はともに父王を死なせないように努力している」

激昂した彼はいきなり剣を抜くと側にいた母に向つて振り上げた。彼はまさしく一氣に母に斬りかかろうとする見幕を示した。折から側近に月光という聰明であり博識な大臣が控えていた。月光は同僚の普婆（ぎば）と一緒に皇太子に一礼してからいった。

「阿闍世大王よ、私たちは今まで吠陀の教えを聞いてきた。大昔から今に至るまで多くの悪王がいて、中でも王位を奪うために父王を弑した悪逆の王子だけでも一万八千人に及んでいると聞いている。しかしいかに悪逆の王子でも、いまだ母親を殺すという極悪無道の

ものは一人もいなかった。もし大王が母を殺す大逆罪を犯すとなれば、それは王族の名譽にも関することである。臣下としてこれ以上の極悪を見逃すわけにはゆかない。いま大王は屠殺業の非人と同じことをしようとしている。もし大王が母を殺すというならば、これ以上城に留めておくわけにゆかない」

こういながら大臣たちは剣に手にかけて、後向きに退り、今にも皇太子に立ち向う態度をみせた。これをみて阿闍世は大いに驚き、かつは怖れを感じて普婆にいった。

「汝はわが父と母のことだけを考へて、王である自分のことを考へないのか」

しかし普婆の答えは同じであった。

「大王よ、身を慎んでいただきたい。私も月光と同じく大王が母たる夫人を害することを黙って見逃がすわけにゆかない」

阿闍世はようやく自分が非であることを悟った。彼は大きに懺悔し、大臣に向つて助けを求めた。彼は剣を床上に捨て、母を害することを思い止まった。しかし彼は宮殿内事係を呼んで、韋提希夫人を奥深い一室に閉じ込めるように命じた。そして夫人が再び外に出

ることのないようにした。

1 吠陀（べだ）、印度バラモン教の聖典。

二、凡夫韋提希に説く

深室に幽閉された韋提希夫人は、憂いと悩みに苛まれ、次第に瘦せ衰えてしまった。深い嘆きにおちた夫人は、遙か靈鷲山の方に向つて合掌し、釈尊を礼拝してからいった。

「釈尊よ、かつて私のために阿難尊者をお遣わしになって説法をおさせになった。私は今悪縁によつて自分の子のために閉じ込められている。私ごとき者に釈尊をお迎えすることはできないことである。せめて目連尊者と阿難尊者をお遣わしになって、思い悩む私を訪ねさせ、説法させて欲しい」

こういふ終ると夫人は、悲しみに耐えきれずに、声をあげて泣き崩れた。しばらくして夫人は改めて遙か釈尊の方に向つて礼拝した。こうして夫人がまだ頭を挙げきらぬ内に、早くも釈尊は靈鷲山にいて夫人の願いを知った。そこで直ちに目連、阿難の両尊者を夫人の許にお遣わしになったが、更に釈尊ご自身も同じく靈鷲山をお発ちになり、王宮に

向われた。

韋提希夫人は礼拝から頭をあげてみると、そこに釈尊のお姿を拝するのであった。その時の釈尊は百宝の蓮華台の上に坐され、身は紫金色に照り輝いていた。左には目連尊者、右には阿難尊者が侍者として控えていた。更に宮中には天部の神々がいて、天から妙華を雨ふらし、釈尊を供養していた。

目の前に釈尊を拝した夫人は、思わず身につけていた瓔珞その他の飾り具をかなぐり捨て、身体を地面に投げ出し、大声で泣いた。やがて夫人は釈尊に訴えて申し上げた。

「釈尊よ、私は一体どのような罪があつて、悪逆の子を生んだのであろうか。また釈尊はどのような因縁によつて、提婆達多と親戚となり給うたのであろうか。

願わくは釈尊よ、私のためにこのような憂い悩みがない世界を教えていただきたい。私はその世界に往生したい。この世のように濁り汚れた世界は私の欲する所でない。ここには地獄、餓鬼、畜生の境地が充滿していて、悪い人々が多く住んでいる。

願わくは釈尊よ、私が往生したいと願う世

界には悪人がなく、また悪人の名すらない世界であつて欲しい。私は自分の罪を心から懺悔し、釈尊を礼拝する。そして慈悲を垂れ給はんことを願っている。

願わくは釈尊よ、諸仏は清浄な修行を行なうことによつて、それぞれの浄土をもっている。これらの浄土を観察させていただきたいが、それにはどのような修行をしたらよいのか。浄土を観察できる方法をお教え願いたい」

夫人がこのようにお願いすると、釈尊はたちまち眉間から光明を放ち給うた。この光明は金色に輝き、十方世界を照した。この光明は再び釈尊の頂きに還つて、大きな金台を形作つた。光明の中には十方諸仏の国土が次々と現われた。中には七宝で合成された国土があり、または蓮華が咲き乱れている国土があり、または異つた国土の有様が目の前に現われた。こうした各種の国土を見ることができた夫人は、釈尊に申し上げた。

「釈尊よ、これらの国土はみな清浄であり、光明に輝き、勝れた国土である。しかし私はいま極楽世界の阿彌陀仏の浄土に往生したいと願っている。願わくば私に極楽に想いをこ

らし浄土が観られる方法をお教え願いたい」
釈尊は夫人の心の内を知って喜ばれ、微笑をうかべられた。その時、釈尊の口からは五色の光りを発した。釈尊は夫人の願いによって説法されるのであった。

「汝は知っているかどうか。阿弥陀仏はここを去ること遠くない所にまします。汝は思いをこらし、清浄の行を行なうことによつて浄土を観察せよ。今汝のために広く譬えを説くであらう。また未来世の一切の凡夫が汝と同じく清浄な行を修するならばその者を浄土に往生させるであらう。

極楽浄土に往生したいと願う者は三福を修さなくてはならない。その第一福は父母に孝養をつくし、先輩を敬い、慈悲深く殺生をせず、十善業を行なうことである。第二福は仏門に入り三宝に帰依し、戒を保ち、規則正しく已れを慎むことである。第三福は菩提心をおこし、因果の理法を信じ、大乘經典を説誦し、人々に仏法を説いて修行させることである。この三福を浄土往生の清浄の業というのである。

阿難と韋提希よ、汝らのためだけでなく、

未来世において煩惱という悪識に悩まされる人々のために、極楽浄土を観察することができ清浄な行を説くであらう。阿難よ、汝はこの教法を広く人々に伝えねばならない。仏力によつて浄土を見せるから鏡に自分の姿を映すように、明かに見ることができよう」
ここで釈尊は、特に韋提希夫人に向つていつた。

「汝はもとも凡夫なのである。何故なら汝の意識も思考も弱く劣っているからである。汝はまだ天眼通を得ていないから、遠くの極楽浄土を直接見ることができない。しかし諸仏には方便があつて、それによつて汝に極楽浄土を見せることができるであらう」

夫人は釈尊に申し上げた。
「釈尊よ、私ごとき者は釈尊のお力によつて初めて極楽浄土を見ることができるのである。しかし釈尊が入滅された後になつて、世の中が次第に悪くなり、遂に人々が五苦に責められる時代となるであらう。その時代になつたならば、人々に私と同じように極楽浄土を見させるためにはどのようにしたらよいのであろうか」

1 十善業は十善戒ともいう。不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不邪見のこと。

2 三宝は仏宝、法宝、僧宝のこと。仏は相手に応じた説法をして救済する仏さま。法は仏教のおしえ。僧は仏法を修め、争うことなく、他人につくす人々。

3 説誦の説は經典をみて説むこと、誦は經典を暗記していて説むこと。しかし法然上人は説誦の意味の中に、書写すること解説することを含ませている。即ち

「説誦とは、即ちこれ五種法師の中に転説、誦誦の二師を挙げて、受持等の三師をあらわす。もし十種法行に約せば、即ちこれ披説、誦誦の二種の法行をあげて、書写供養等の八種の法行をあらわす（中略）あるいは般若、方等および涅槃經等を解説し、書写しもつて往生の業となせ」（選訳本願念仏集）
といわれている。

4 天眼通は一切の人々の生死や苦楽の様子を自由に知ることができる能力のこと。

5 五苦は人生の五つの苦で、生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦のこと。

、原理運動、

新しい神々に憑かれた

若者の生態

藤井正雄

理想世界天国は

実現されるか？

いつ、誰によって、

いかに全うされるか

「人類は誰でも理想天国を切望してきた。然し天国とは如何なるものであり、何処に、又どの様にして来るかは想像だにする事が出来ず唯夢のように考えられてきた。然し乍ら此の夢を長い人類歴史を通じて古今東西を問わず欲して来た事は事実である。

此の天国は如何なるもので、又如何に実現し得るか、又自分のものにする事が出来るかと、その方法を見出さんが為に難業苦業の修道生活をし、悪魔との闘いをなし、殉教の路程を繰返して最善だと思ふ全ての方法に血を流し、汗を流し、涙を流して努力の一片一頁を人類歴史上に跡を残して今日に至ったのである。又天国を説き教えてきた宗教でさえ、理念的なもの他界的なものとして現実の実生活の人間とは遠く、罪の内に苦悶し乍ら、苦

しみの内にもがき乍ら
いずれも天国だ、救い
だとまちがった盲目的
宗教のもとに、自己欺の内に来ったのである……



今や此処に至って人類は万策尽きて破滅かの重大な問題にぶつかつたのである。

しかし人類危機の今日にも人類長年の宿願である平和と理想を実現する可能性は充分ある。愛にして全智全能の創造の神は宇宙万象を創造し給う時創造の原理と自由理想によって造り給うたので、此れが神の御意に反して墮落の道に行くも直接干渉し給う事が出来ず自由國內に於て、原理的に彼等を救おうと努力なさつた……

……人間の手段としての限界を悟り、絶対絶命だと知つた時には誰でも人間は最後に残る一つの超人的な手段を望むものであり、此れが「神よ助け給え」との自動的に出て来る発作的願である。此の時神は救主を地上に遣し給ひ、今迄の人間の頭脳よりの知恵、手段でなく、

天よりの絶対的な神の知恵による手段である……

……神は天地創造理想を全うせんと努力なさつ………た後に残るものは唯人間の心の創造のみである。此れは我々によつて成され、人類の窮極を打開し新しい理想世界を生む愛と真理による運動である………

此の様に真理により、愛により全ての一体化理想は実現され永久に戦争のない平和の世界が神を中心として生れる。愛と真理に満ち、文化・文明の最高度に発達した世界である。此れが全人類の欲した地上天国だ………」(傍点は筆者)。

三人が一組となり、一人が「統一原理」による統一世界Vのたれ幕をもち、一人がなにかに憑かれたように充血したマナコで、コブシをふりあげて「人神の子よ、義人よ、善人よ、今こそ立ちあがれ、同じ思いで一つの場所に集い、一致協力して、



六千年の罪惡の歴史を清算し、理想社会を建設しようVと叫び、一

人が左記に引用したビラを配って歩く姿を街頭でみかける人もおおい。

統一原理とは

聖者の奥義を明かす

—愛(自己睡眠)の讃歌?—

「統一原理研究」運動のいう「原理」とは何か。第三者には理解することがはなはだむずかしい。四、五年程前に工事中の新宿駅頭

で、はじめて眼にふれたとき、また一昨年札幌の北大の近くで、街頭「講義」をきいたときは、キリスト教の宣教かと目を疑った。しかも、その血走った十七、八のお下げの少女

の狂気じみた弁舌ぶりから、到底教義のないたるかは判然としなかったし、まして今日の社会運動にまで進展する姿などは、想像することすらできなかった。

配られたビラには、毎日「原理」とは何かの講義が新宿御苑の近くの白鳥ビルの七階で日曜を除く午前十時から午後九時から行なわれている旨が誌されていた。

彼らのいう原理とは、一体、なにを説明するものであるか。再び「ビラ」のなかには、次のように記されてあった。

一、創造原理—墮落により失われた人生の全ての問題解決の鍵は、神がこの世を如何に創造し給うたかの問題にある。そして神と人との創造原理的な関連を明確に知り、神の性相は(神性)何であり、愛とその目的は何であるかを知る。

一、墮落原理—神から離れ墮落した人間は本来歩むべき原理の軌道から離れ、心は善を欲すれど欲せざる罪を常に犯して来た。人間はこの根本原理がわからず悔改めど罪はたえず芽生え、今日迄の罪惡歴史を形成している。この根本的な原因を明かし罪の根を取り除かぬ以上、救いはない。

一、救世原理と再臨論—全能なる神は何故キリストを十字架につけたか。そしてその救いは今日再臨は如何なる形で来たるか。そしてその期はいつか。

一、復活原理—死とは何か。生とは何か。そして復活、新生は如何になされるか。

一、予定原理と三位一体原理—人間の運命は神が予知し給うのか。何故に人間社会に幸不幸があるのか。人間の墮落も神の予定の上か。全智全能の神は何故人類を一日も早く救えぬのか。

一、終末原理—聖書の予言せる終末時代、法華經の予言する末法時代とは何か。太陽月星が落ち天体が焼崩れるという聖書の予言が事実おこるのか。人類は破壊か！それとも平和か。そして理想世界は如何に具現化されるか。方法、手段。

一、復帰原理—人類歴史は神の救いの摂理歴史である。では神は如何なる原理公式路程にてこの歴史を摂理し給うのか。この救いの摂理の為に新旧聖書の内で比喩で書かれている全ての部分は如何なる意味に解明されるか。

ここで逐次「原理」を説明する紙面をも

たないが、一言でいって、原理運動とは聖書全巻の奥義を明し、再臨成約時代に至った事を宣言し、唯一絶対なる聖書原理によって全ての宗教を統一し、神の救いの御意である愛の真の「神の国」をキリストの再臨と共に実現し、人間始祖の墮落によって始まった罪惡世界を創造本然に復帰して神の宇宙創造理想を実現することを目的とする」(「キリスト教年鑑」(世界基督教統一神靈協会(略称・統一協会)の学生を中核とする全国大学原理研究会の運動をいうのである。

教 団 成 立

四 年 の 歩 み

統一協会とは、今から十五年前、朝鮮動乱直後に韓国人文鮮明(四十七才)の創始するキリスト教系の新興宗教で、世界に再臨したキリストである文鮮明のもとに世界に十二使徒が布教伝道に従事しているといわれる。日本への布教は、昭和三十四年ごろに十二使の一入である崔翊翼(サトウハチロー)が四年間全国伝道に従事し、その成果あがって昭和三十八年に宗教法人の

認承をうけている。本部は東京都渋谷区南平台町にある元岸首相公邸の隣りにおかれている。信徒の中核は大学生にある。早稲田五〇名、中央三〇名、東大二〇名と全国七十七大学千名、高校生千人、社会人三百に達するといわれている。



蒸発する大学生

立ちあがる被害者同盟

「原理運動」が「マスコミ」に登場したのは、本年五月七日号の「潮流ジャーナル」にはじまり、朝日新聞(七月七日)が「親泣かせの原理運動学生間にひろがる学業放棄や家出」の見出しで、原理運動のために家庭が破壊されたという父母の訴えが学校や警察当局に相次いでいることが報道されると、たちまち週刊誌や、テレビ・ラジオで次々と社会問題としてとりあげられた。ことの発端は、昨年夏から修練道場建設寄附活動(目標三千万円)が始まったこと



にある。

学業を放棄して、リヤカーをひっぱってクズ屋をやり、週刊新聞『東京オプザバー』の立売りをやって八原研運動資金Vを得ていた学生たちが、一斉に帰宅して父母に寄附金を要求した。「家庭で『神の子』であるとのあかしをせよという教えにしたがって、親に対して赤ん坊をさすような口ぶりで説教をするうえ、寄附金を断わられると、いきなり親を「サタン(悪魔)」とののしり、断食をしてテコずらせたり、「金を出さないと殺される」とおどしたりする。

さらに「寄附金を出さないのなら親子の縁を切ってくれ」「遺産の前渡しを要求しているだけだ」「嫁にはいかなから支度金を出してほしい」……(朝日新聞、七月七日より)と、その被害の実態を伝えている。

昨年十一月に早大・法大生の父母十二人が
全国大学原理研究会

(略称・全大原研)におしかけて、①学業放棄を煽動しないよう②宿舍に泊りきりの子女を帰してほしい③寄附金集めをやめてほしい、などを訴え、「被害者の会」を組織している。東京のほか、大阪・京都・福岡・長崎・広島などの都府県宗教法人係、教育委員会、警察などに問題がもち込まれており、遂に九月十六日には「対策として、今回、私たち父母が、全国的に悩む者の強固な組織を作り、世論に訴え、批判を願ひ、活動の基盤を失わせるために八原研運動対策父母の会Vを結成」(原理運動対策全国父母の会設立委員長・高橋一博氏の呼び掛け)して第一回大会が新宿の東京社会保険会館で開かれるに至っている。

大学には行かず、家を捨て学業を放棄してまで原理運動に身を投じ、親を肉のかたまりとしか考えず、やり込められると、まだ親は意識が低いとうそぶく現代青年の姿は、フーテン族、ヒッピー族などとともに大きな社会問題となっている。

また、一方で全大原研会長の小宮山嘉一

氏、統一協会会長久保木修巳氏とともに立正佼成会の出身で、法華経を統一原理的弁証法哲学で止揚したといわれ、信者はなんらかの新興宗教を遍歴してきた宗教的浮動人口を吸収しはじめていることから、家庭争議からやがて宗教戦争へと発展のけはいすら窺われる。この奇怪な新興宗教の動勢は割備学会とともに台風の目になっている。

仏教徒佩用

法輪(輪宝) バツヂ

仏教徒の自覚と仏教徒としての誇りを胸に輝やかせて仏道に精進するよう金信徒にすすめましょう

見本 千共百円五箇以上二割引き
大量御注文の節は御相談いたします

東京都台東区台東四ノ二五ノ四

全世界仏教法輪普及連盟

電話(八三二)七五一五番
振替 東京三三六六番



ムダの多い

玉山成元

爆撃

「控え目にみても、われわれの爆弾の三分の一は、海へ捨てられていた。北爆行は出撃回数で指揮官が点をかせぐためのものであった」——今年二月まで、米海軍スカイレーダー機のパイロットとして第五十二攻撃飛行中隊（空母「チコンデロガ」に所属していたアレックス・ウエイヤー氏（三三）は、ミッドランド市でこう語った（朝日タニシ）。

同氏は海軍生活九年、現在はダッ・ケミカル社に勤めているが、「米軍機と人命が三軍間の競争のために失われている」とさらに次のように述べた。

パイロットがいちばん悩むのは、他の空母所屬機がたてた出撃回数の記録を破るよう申渡されたときだ。私の知っているほとんどのパイロットたちがパイロットをやめようとしている。中隊員二十五人のうち二十一人までが、私が「チコンデロガ」を去るとき、やめるつもりだといっていた。

多数のパイロットが生命の危険をおかすのがいやで、一発二千ドルもする爆弾で、一晩で復旧される小さな橋に投下するのを拒

否した。一カ月に十五回も同じ鉄道車両を爆撃したパイロットがいた。そのつど「目標破壊」と報告された。

南ベトナム人の民主主義を守るためにベトナムに来ていたのだと心から考えているものはいない。大部分のものがベトナムは中国と戦争になった場合の足がかりだと考えているのだ。

ウエイヤー氏の談話について、D・C・リチャードソン海軍少将は「空母同士の出撃競争を許さないという通達が海軍最高幹部から出ている。爆弾のいくつかは海中に落されているが、これは艦上での爆発事故を避けるための安全措施である」と述べている。

艦上帰着時の爆発事故防止策としては当然かもしれない。しかし出撃競争中止の通達が出ていることは、競争があったことを物語るもので、事実上は現に行なわれているとみてもよい。

第二次大戦終了後二十二年目の記念日に、當時を回想していた私は複雑な心境にひたった。昭和十九年七月、太平洋上の戦略拠点で

あるサイパンの失陥と共に東条内閣は瓦解し小磯内閣がこれによって内閣を組織した。アメリカ軍の活動はいよいよ活発となり、翌二十年に入ると全国の主要都市は空襲に見舞われた。

その頃私は、福島県浜通りの田舎町、広野町立小学校の六年生、生活そのものはのんびりしたものであったが、毎日のように疎開してくる都会人を見、空襲警報のサイレンを通して、子供心にも形勢の不利を知った。最大のショックは、変化に富んだ美しい海岸に限りめぐらされた擬装鉄条網と、白砂の上に岩と土で盛られたグロテスクなトーチカ作成への勤勞奉仕であった。福島海岸線はアメリカに一番近い。彼らが敵前上陸する地点は必ずここになる。事前偵察の目をあざむくため三メートルの小松の杭をうち、藤の蔓を切ってそれに巻きつけ、トーチカの窓からは直径四十センチの丸太が太砲に擬して顔を出していた。遠くから偵察するアメリカ軍の双眼鏡は軍備された海岸線が映るので恐れをなすという想定。婦人たちは竹槍の練習に余念

がない。それでも日本が負けると考えていた人はほとんどなく、神風を信じていた。

ところが二十年の六月になると日立や釜石が艦砲射撃され、かすかではあるが無気味な震動が耳につき、爆弾の威力に肝を冷した。それよりも一番こたえたのは毎朝定期的に襲来する艦載機の波状攻撃。スマートなグラマンF6F、翼がW型をしたワイルドキャットという最新鋭機が爆音をとどろかす。目的地は中通りの郡山を中心とする工業地帯や常磐炭鉱、あるいは交通機関で、私の住む田舎町に直接の関係はなかった。しかし空襲を告げるサイレンは朝から鳴り続け、ラジオの臨時ニュースより早く飛行機の姿をみては仕事どころではない。ご飯をたたくのも遠慮がち。お寺は建物が大きいから目立つといわれ、私などは部落の子供と裏山の森に避難。オシャベリすると電波探知器でキャッチされ、機銃掃射されるとオドされて、無言行をした苦しい経験の思い出。今から考えれば滑稽至極であるが、ベトナムなどでは現在でも深刻に考えられているのではなからうか。

それはともかく目的地の攻撃を終えた艦載機は必ずといってよいほど、私たちの町から洋上に姿を消した。そのとき再三にわたり小高い山の上にある拙寺の上から帯状に展開する麓の町へ掃射を行なってゆく。ときには田圃の中を走る犬をめぐけて。頭上から射つので私たちは大丈夫と信じていても生きた心地はしなかった。それにしても農家にお見舞して帰る心理は不思議でならなかった。

去る八月十七日の夕刊により、今になってその謎をとくことができた。第二次大戦中、アメリカ軍は日本の沿岸に空母を置いて、連日波状攻撃をかけた。しかもかなりむだの多い爆撃を。これとて作戦中の空母同士に相当な競争があったことは事実である。出撃回数と爆撃成果は必ずしも比例しない。しかし回数で指揮官の点数が決まるとなれば、爆弾を海へ捨てて帰るのも当然である。以前にそういう事実があったということは、これからもあるということ、幹部からの命令などで簡単に是正されるものではない。それを認識するのが学問である。

浄土宗のおしえ <8>

浄土三部経について

その 2

丸山博正



ある用事で、他家を訪問する場合に私どもは、どんな順序をふむでしょうか。別に規則などはありませんが、先ず、相手に失礼にならない服装・時間などを考えるでしょう。相手の人にあつたら、その場に応じた挨拶をするでしょう。そして用件になるのです。これは、簡単な例に過ぎませんが、何事によらず、一つの場が定まってから行なわれないと人の心にスムーズに入っていくかないものであります。逆に言えば、ある目的に応じた雰囲気というのは、いろいろな順序をふむことによって盛り上ってくるものなのです。ことに、宗教的儀式の場合には、それが大切なこととは言うまでもありません。先月号から浄土三部経について書いておりますが、私どもがお寺で法要を営むときも、もちろん、いきなり三部経を読むわけではありません。先月も少しふれましたが、今月は浄土宗の日常勤行の主なものについて説明し、それから、「観無量寿」経と「阿弥陀経」について述べることにします。

はじめに「香偈」をとなえます。偈というのは一句の字数が定まっているものを言いま

す。この香偈では「願我身浄如香爐」のように七字で一句になっています。紙数の都合で全文はあげませんが、その意味は願わくは自分の身は香爐のように清く、心はその香爐の火のように智慧に輝き、たちのぼる香のように戒をまもり心を静めて、仏に供養いたします。ということです。供養とは物質的にも精神的にも、つくすことを言います。

次に「三寶礼」です。文字通り三寶を礼するのです。三寶とは仏と法と僧です。阿弥陀仏・釈迦仏ならびに諸仏と、そのお説きになった法と、その法を私どもにひろめて下さった高僧達を、心から礼拝するのです。

次に「奉請」です。奉請とは「ねがいたたてまつる」ことです。何を願うのかと言いますと、十方諸仏・釈迦仏・阿弥陀仏・諸菩薩にたいして、どうか現在法要を営んでいるこの仏前の道場へ、来て下さるように願うのです。心から願うとき、その寺の本堂は諸仏・菩薩で満ちています。

次に「懺悔」をいたします。すでに本堂には諸仏・菩薩が満ちています。その前で過去・現在の反省をし、あやまちは、悔い改

める心をしつかりと定めるのです。人の心は常に洗わなければ、よこれます。私どもは仏前の懺悔によって心を洗い清めて、仏の心を素直に受けいれる状態になれるのです。

次に「開経偈」です。私どもは直接釈尊の説法をきくことは出来なかったが、釈尊の説法の内容が伝わって、今それをきくことが出来る。いろいろな生物の中で、人間として生まれることが出来て、しかも仏法を素直にきくことが出来ることは考えてみれば大変なめぐりあわせです。しつかりと法の内容を理解しようという心でとなえます。

以上は主なものですが、このような順序をふんで、いよいよ三經統を読むこと。なるのです。浄土宗日常勤行などをお持ちでしたら御覧下さい。それではこれから先月の「無量寿經」にひき続いて「観無量寿經」と「阿彌陀經」について述べてまいります。

「仏説観無量寿經」一卷は瞿曇耶舎という人によって訳されました。略して「観經」とも言います。内容から「十六觀經」とも申します。この觀經は説法の場合が二つあります。

す。第一の場所は釈尊当時のインドのマガダ国の王舎城です。そして王舎城での説法の後、釈尊は靈鷲山という山におかえりになり、そこで同じ内容が人々に伝わります。これが第二の場所です。第一の説法を王宮会と言ひ第二を「靈山會」と言っております。ですから王宮会を述べるにより觀經の内容は理解されます。

第一は序分です。これは先月号で述べたように一經の説かれるようになるまでの部分と言ひます。王宮会の序分はと申しますと、釈尊の従弟である提婆という者が、釈尊の名聲をねたむあまり、時のマガダ国の太子の阿闍世をそそのかして、父である頻婆娑王を殺させ、自分は新王になった阿闍世を巧みに操って、釈尊に代つて宗教的權威をほしいままにしようとするらみまふ。提婆の巧みな言葉にのせられて、阿闍世太子は次第に父王を恨むようになり、遂には父王を幽閉し、餓死させようといひます。そして、王を救おうとした母后の掌提希夫人さえも七重の獄屋に幽閉してしまひます。逆上した人間の心とは、まことに恐ろしいものであります。産みの我が子

に殺されそうになるといふ最大の悲しみにあつた掌提希夫人は、ひたすら釈尊に対して救済を願ひます。釈尊はその心を察せられ、弟子の日蓮と阿難とを空から獄屋につかわし、自身もまた掌提希夫人の前に御姿をあらわします。掌提希夫人は釈尊に「憂いや悩みのない世界を示して下さい。」と申します。釈尊は十方諸仏の浄土を夫人のために示します。夫人はそれらの浄土の中から西方阿彌陀仏の浄土を選び、その浄土へいくにはどうしたらよいかをたずねます。そこで釈尊は掌提希夫人ならびに未來の衆生のために浄土へまいる方法を説かれることとなります。

第二の正宗分は「仏号掌提希汝及衆生」というところから無量諸天発無上道心ということまでです。ここでは先ず掌提希夫人の願ひによつて浄土の壯嚴世界と仏とを觀察する方法が説かれます。これは定善十三觀といわれるもので、日没を觀する日想觀から始まり、水想觀・宝地觀・宝樹觀・宝池觀・宝楼觀・華座觀・像想觀・真身觀・觀音觀・勢至觀・普觀・雜想觀に至る十三の觀法が説かれています。

次に釈尊は未來世の散亂した心の凡夫のために上輩・中輩・下輩の散善を説かれます。

この上・中・下はさらに各々三品ずつに別れて説かれているのでこれを散善九品と申します。この釈尊の説法を聞いた韋提希夫人は、淨土に往生するここが定まり、五百の侍女は、みな淨土に往生したいと発願します。

第三に流通分です。ここで釈尊は、今まで定善散善の教を説いて往生をすすめたけれども、仏の本意は一向に南無阿彌陀仏の仏名を称えることにあるのだとされて、阿難尊者に「汝、この語を持せよ」と仏名を末代まで流通するように託せられます。このようにして王宮の説法が終り、釈尊は靈鷲山へ帰られます。侍者の阿難は、この説法を人々に繰返して伝えるのであります。この部分を靈山会と申します。原語を当てて、耆闍会とも言いいます。

以上が親経の概略です。ここで大切なことは先ず第一に韋提希夫人の存在です。王后という身分でありながら最大の不幸にあつて、悲しむところは普通の一女性であり、その意味では凡夫であります。そして人間として述

れることの出来ない生老病死をはじめとする人間の背負っている宿業に思いいたり、仏を求める姿は正しく厭離穢土欣求淨土であります。第二に定善十三觀であります。極樂の莊嚴世界と仏とを觀察することでありますが、これは凡夫にはとても出来ることではありません。仏の力があつてこそ出来るのであります。釈尊から直接の指導をうけることの出来ない私共はそれではどうしたらよいか、それが第三の問題で、ここで称名念仏が示されるのであります。ですから称名念仏こそ私共が阿彌陀仏の世界へまいり、一切の煩惱から離れて、仏への道を歩む唯一の方法であることが、この親経はまことに巧みな構想によって人々に伝わるように作られているのです。

仏説阿彌陀經一卷は鳩摩羅什という人により訳されています。三段に分けて述べますと大体次のようになります。

第一の序文は、ある日釈尊が舍衛國の祇園寺に多くの弟子達と共にいられた時のことである、という部分で、ここでは釈尊は誰の願いにもよらず、自分から説法をはじめとお

れます。

第二の正宗分では、先ずはじめに西方十万億仏土を過ぎたところに極樂淨土があることを示され、この世で考えられるあらゆる理想的な形容で、その淨土の様子が説かれます。そして、その淨土の仏は光明・寿命が無量であると説かれます。すなわち、衆生救済の智慧と慈悲の光が永遠であるということです。そこで「無量」という意味の原語をとつて阿彌陀仏と名づけたのであるということも説かれます。

次にこの淨土に往生したものは、再び生老病死という人間の宿命を繰り返さない、すなわち不退転になれることが説かれ、それには称名念仏することであることが説かれます。

次に釈尊はこの念仏往生の法が、いつわりでないことは東西南北千下の六方の諸仏が、すべてこの阿彌陀仏の功德を説く経を信ずるようにすすめて、証明しているのであることを説かれます。そして、ひたすら凡夫の信仰帰依をすすめられているのであります。第三の流通分は、以上のような釈尊の教えを聞いた舍利弗などの弟子達が、必ず実行することを誓つて終つています。

お歌をいたたく

秋

あみだ仏にそむる心のいろにいでは

あきのこずゑのたぐひならまし

(初修御伝 第三十四)

「そむる」はそまる、「心の」は心がということ。また「たぐひ」は比較して同じようなものであるという意味であり、「まし」は推量の言葉です。従ってお歌の意味は

阿弥陀さまを深く信じ、阿弥陀さまのこの上なく大きな慈悲に染まっている私の心がもし外に色として表われ出たとするならば、それはあかあかと紅葉した秋の梢のようない見事な色合いであるだろう。

ということになります。秋はもの静かな落ちついた季節であります。そして実りの季節でもあります。これまで緑一色であったこの世界が、うるわしく色々に飾りたてられる時であります。

また秋がこのように色づくことは、春夏と

成育してきたものが、みな一様に熟しきったからであります。色とりどりに、枝も葉もどこに実がついているのを見ると、どれもこれも誇らしげな姿にみえます。自然の装いの立派さ充実さ、自然の恩恵をこの上なく感じることのできるのは秋であります。

こうした秋という感覚は、そのまま法然上人に対する感謝の念に通ずるものがあります。法然上人は幼くして文殊菩薩といわれた程の秀才であり、それだけに人一倍の御苦心がありました。往生要集を講義して、上人の講説が最も勝れているとし、智慧第一と称賛されたのは上人二十六才のときでありました。しかしいかに知識がすぐれていても、内心の満足が得られず苦悩の日が続きました。この間の勉学の深刻さを物語る上人の御詞として

「ここにわがごときは、すでに戒定慧の三学のうつはものにあらず。この三学の外にわが心に相応する法門ありや。わが身にたへたる修行やあると、よろづの智者にもとめ、もろもろの学者にとぶらひしに、おしゆる人もなく、しめすともがらもなし」

というのがあります。この一文は末代にのこる意味深い、お言葉であると思います。だからこそ浄土宗が開宗されたのであります。善導大師の「これを正定の業と名づく。かの仏願に順ずるが故に」の一句も、どの位多くの人が読みすごしてきたことでしょう。勅修御伝にこう記されています。

「末世の凡夫、弥陀の各号を称せば、かの仏の願に乗じて、たしかに往生を、うべかりけりといふ、ことはりを、おもひきため給ぬ。これによりて、承安五年の春、生年四十三、たちどころに余行をすて、一向に念仏に帰し給ひけり」

この記事が浄土宗開宗を承安五年とする根拠になっています。

「天にあふぎ地にふして、よろこぶべし。このたび弥陀の本願にあへる事を、行往坐臥にも報すべし。かの仏の恩徳を」

熟しきった果実の色つや、まさに落葉しようとする樹々の紅葉の艶やかさ、こうした光景をみて、上人は阿弥陀さまにまかせきったご自分を省みられたことでしょう。ここにこのお歌の意味があります。(村瀬秀雄)

絵	連
話	続

みんなの法然さま

—紫雲たなびく—

高橋良和

さしえ 加藤直



比叡山の僧兵たちの暴挙が迫ってきたようである。

ある夜のこと、妙香院の僧正の寺でひそかに会議が開かれた。

このような暴挙は許せない。

然し亡き上人の御遺骸にもしものことがあっては。

額をよせて法蓮房、覺阿陀仏（かくあみだぶつ）それに妙香院の僧正が相談していた。

もうこれ以上は、どうすることも出来ない。

御遺骸を他の地にそーっとお移し申してはどうだろうか。

然しそのようなことが出来るかな。

みな賛成ならやろう、これ以上辛棒していると、僧兵共のあばれこみに会うにきまっている。

夜の更けるのを知らぬようにはなはつづいたが、結局す

るところ、御遺骸を他の地に移すより方法がなかったのであつた。

それならば早いほうがよい。

今夜のうちにでも。

そうするほうが、人に知られないですむだろう。

その夜も深更になって、吉水の庵室のあたりは、ただならぬ気配がただよい、土をかけた上人のお墓を掘りおこす鍬の音が、しじまにひびいていたのである。

やがて、土のなかから上人がおさまる石の棺があらわれたのであるが、そのとき弟子たち一同は、声をこらして

なむあみだぶつ
なむあみだぶつ

と合掌したのであった。



そして、静かに石棺の蓋をとって、なかをのぞくに、なんともいわれぬ香りがして、静かにねむる上人の顔がまるで生ける人の如く、かがやき、さすが、一世の徳者としての風貌

は少しも衰えず、ならば弟子たちは思わず、

お上人さ
ま。

と叫んだほどである。

いよいよ時間
がきたよう
だ。
用意はよい
かな。
はい、お待
ち申してお
ります。
衣の袖をま

くりあげた弟子たちは、やがて石棺を輿にのせて、静かにそれを持ちあげたのである。

さあ、いずれにまいりましょうか。

宇都宮の蓮生が先頭に立って歩きはじめると、法蓮房は、西の方行こう。あすこなれば人に知られずに隠くすことが出来よう。

と命じると、石棺をかついだ行列は吉水の庵室を出て、いよいよ京の都に入って行ったのであるが、夜中ではあったがこのことを聞きつたえた信者たちは、いつ知ったのか、知らぬ間に一千余人となり、かすかな禪名の声と共にこの一行を見送ったのである。

そしてこの行列は西へ、西へとまるで、刑場に向う囚人の列のごとく声なくすすんだのであるが、それから一時間もすぎた頃、太泰広隆寺についた。そしてここでしばらく石棺を隠くしたのであるが、然しやはり僧兵の詮策は、なおきびしくつづくのであったから、

もう仕方がない。

これ以上、このままでおくことは出来ない。

という弟子たちの相談で安貞二年正月二十五日のあけ方、遂に西山広谷の近くの栗生野の幸阿弥陀仏（こうあみだぶつ）のもとにあずけたのであった。

みんな、もう御遺骸はこのままではおくことが出来ない、山門の僧兵がやってくればたちまち、焼かれるにきまっている、わしのいうことを聞いて、火葬することにしたらどうだろう。

幸阿弥陀仏は遂に口を切ったのである。

そうだ、それより方法があるまい。みな衆はどうかな。

法蓮房も決意したようである。

仕方がございません。

弟子たち一同の心はきまったのである。

それならどの場所でも火葬しようか。

あの三またの松の木あたりはどうか。

なるほどあれならよからう。

やがて、石棺は三またの松の木のもとにそーっとおかれ、あたりにおちている枯松葉をあつめ、その上にたき木を積み重ねたのであった。

火をおへりたしましょう。

火打石の音が、ひびいて、松の枯葉にうす白い煙がたちはじめたようであった。

なむあみだぶつ。

禰名の声のうちに、煙はやがて紫にかわり、松の枝一めんにひろがって、なんともいえぬ香りが、この栗生野にあふれ

たのである。曉の空は白々としてきたが、紫雲はその附近をつつみ、ほとんど御遺骸が茶毘し終るまで、あたりたちこめたのであった。それからしばらくして、上人の御遺骸は、お骨箱におさめられたが、ならば弟子たちの間には、姿の変わった上人の御様子にただ涙するばかりであった。

もうお骨におなりになれば僧兵もやってこないだろう。

というので、御骨を幸阿弥陀仏にあずけて、弟子たちは一同それぞれ退散したのである。

幸阿弥陀仏は御骨を抱きかかえながら、上人の迫害のことを思い、義憤の涙にくれたのであった。

然しこの茶毘したあとに、やがて立派な寺が生れた。これが現在の西山浄土宗総本山の光明寺であり、この地を浄土根元地と呼んでいる。広谷での法然上人の教化が、浄土念仏を最初にすすめた地として、浄土根元地ということなのである。いづれにしても、光明寺の遺跡としての意味は、この茶毘したところとしても、今尚大切なところである。

その後、この上人の遺骨は、方々に分けておまつりするところになり、その一つが今の知恩院の御廟におまつりするようになったので、知恩院が祖廟といわれるのも、吉水の庵室のあとであり上人の御遺骸を埋めた処に御骨をまつるといふ、そのゆかりによるのである。

キャンプの朝

岡 本 圭 示

「リリリリリン」枕元で目覚時計がなった。

午前六時二十五分。

僕はスカウト達を起すため身支度を整え、テントの外に出た。もう太陽は山の上に顔をを出している。山中湖の朝は非常に涼しく気持ちいい。僕はゆっくり思いきり深呼吸した。

何んとうまい空気だろう。からだ全体が蒸発して太陽の光の中へ、朝モヤのたちこめる森の中へスーッと吸いこまれていくような錯覚におちいった。

「ああ、ありがたい」

僕は思わず口に出した。この大自然と一体となった大きな幸福感を味わい、生きているうれしさを実感した。この地球上で自分一人だけで生きていくことは不可能である。今ここに「私」があるのは遠い先祖からの「いのち」をうけついでいるからである。私は長い

一本の線で先祖まで縦につながっている。又天地自然の恵恩に浴することがなかったならば、ロビンソンクルーソーもたった一人無人島で生きぬけなかったように、私達も、太陽、空気・水・食物によって生きていられるのである。これが私達の身のまわりの横の関係である。この縦の線と横の線との深く大きなつながりを考える時、人として感謝の念をおこさずにはいられないであろう。このような関係において自分が生かされていることへの感謝の気持ちが宗教への入信の第一歩であり、信仰の基礎であると思う。

しかし現在、特に都市では、太陽の光はスモッグで曇り、空気は自動車の排気ガスで濁り、食物は不必要に人工着色され天然の味が失なわれている現状では、大自然のありがたさを味う機会が極めて少くなっている。

ボーイスカウトの子供達を大勢つれ山中湖

に四泊五日のキャンプに來た最初の朝である。サンサンとふりそそぐ太陽を浴び澄んだ空気を胸一杯吸って高い木のテッペンを見上げてみると、チッポケな僕の命が六昔の遠い先祖からうけつがれてきたことの尊さを、身にひしひしと感じることができたのである。

「そうだ、この感激をスカウト達に伝えよう。今こうして大自然の中でキャンプ生活をしている時こそ、自然の恵みと自分の命の尊さ、更に他人の命の尊さをも理解してくれる絶好のチャンスだ。宗教情操教育のかけている日本の学校教育や家庭でもそれが行なわれない現状では、成人してからも宗教心がおこらないのも無理からぬことかもしれない。

ここにいるスカウト達は宗教とか、仏教とかを理解するには幼なすぎる。しかし少なくとも将来芽を出し花を咲かせるであろう信仰のタネを僕は蒔いてやりたい。いやそれは、スカウティングの指導者としての義務ではないか。僕は何か体中に力が湧いてきたような気がし我にかえった。時計は丁度六時半。

もう一度深呼吸して、起床合図のフエを力一杯吹いた。

編集後記

▽今年の夏は格別暑かったが、そのせいでもなからうが、最近の世の中は、どこか狂っている。

▽H大学が紛争している中で教授が「大学の危機に際し学生諸君に訴える」ビラを配つたら、これが気に入らぬと、妨害した学生がいたそうである。

▽自分たちのやることは気に入らぬが、他人のやることは、すべて気に入らぬものとみえる。先生と学生の間柄が他人という気持ちでながめなければならぬところに、紛争の大きな原因があるのかもしれない。

▽現代は相互の対話がおこなわれず、疎通があると云われる。それは、単なる言葉のやりとりではない。心

のかよい合いが欠如しているのである。

△お十夜の季節である。浄土宗独自のこの行事も、年々衰微していくのは淋しいことである。現代こそお十夜の行事が盛んとなつて、念仏を味得し、人間づくりをしたいいものである。

▽歴史夜話仲間好評である。玉山助教授(旧姓鈴木)も、多忙の中を奉仕いただいている。

▽本誌は、無料奉仕が多く大勢の善意によつて与えられている。毎月のレギュラーの各位にしても、一言の愚痴もいわず、黙々と筆をふるつていただいているが、それだけに、その好意に酬うべく編集部一同努力をしている。

▽浄土発展のために、読者倍加に何卒御協力あらんことを。

とを。

▽今年の浄土教学大会は、十一月十一、十二の両日京都の仏教大学に於て開催される。会員諸師もご参加ください。

▽最近の同人の動向一、二佐藤密雄前正大学長、最近漸く静かな書齋生活にもどれて生気充実、講本大乗戒は、最近のヒット、是非一読をおすすめしたい。

佐藤良智正大文学部長兼事務局長は学内多端の折柄ますます多忙、京都往復も屢々、しかし、大学前進のため、安居経理部長と共に大いにハツスル

竹中博士は相も変らず知恵者として、内外共に多難な問題を処理、東大も週一回出講、大いに東大生に蘊蓄を傾けておられる。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一カ年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 十月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十二年九月二十五日 印刷

昭和四十二年十月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鎮仰会

電話東京二六二局五九四四番

郵便東京八二一八七番

——すがすがしい念仏行者の年輪——

空也上人木造着色

六波羅蜜寺藏



一日一日のいのちを大切にしているひとはこの世に決して多くはない。すこしでも楽を願ひ、自分に頼うつひとが多くないのが世のなかでもある。朝に目をさまし、いのちのあるのを心から喜び、身の廻りの必要でないものをことごとくひとに施し、ワラジや下駄好んではくこともなく、藤の衣に、紙のふとんをまとい、生涯を貧に甘んじた。まさにとらわれのない生活の毎日であつたのだ。そればかりではない。法悦にひたりきることのできない空也（コウヤ）は、仏の意のままに自分の体を動かしてつづけて念仏を唱え、ひとにもその尊とさを知らせつづけてきた。高僧でもなければ、高い地位の僧でもなかつた。まづたく庶民のなかにいて、聖なる行を実践していた清僧であつた。このような僧が歴史のうしろにうすまれ、陰れて数多く出てきたから、今日までの仏教に賑々として息吹きが感ぜられてきたはずである。清僧空也の平々凡々たる顔の底に、不屈の意志と、冷徹な叡智とが静かに秘められている。運慶の四男康勝の作とされる、洗練した写実的な彫りに、念仏行者の年輪と人間空也の悩みをふつきつたすがすがしさが結晶し、念仏となえる口から六体の阿彌陀さまが出てくる象徴にとくに昇華されているではないか。

大正大学教授 佐藤密雄 著
文 博

新刊 講本 大乘戒

B 6 判 96 P
価 150 〒35

大乘諸経典に示された菩薩戒の要点を分りやすくまとめた好書

内 容

第一章 各種の菩薩戒（禁律と戒・十善業道・華嚴経の三聚浄戒・涅槃経の三聚浄戒・瑜伽・地持経の菩薩戒）

第二章 梵網経菩薩戒本の訳註（梵網経菩薩戒本の訳註梵網菩薩について・梵網経菩薩戒本の和訳と註）

発行所 大道社

大正大学教授 竹中信常 著
文 博

日本人と仏教

定価 600円
〒 70円

日本人の宗教観を大きく高く展開させた法然上人の教えと信仰を明示した本書は人間と念仏を復興させる巨大な灯である

教育新潮社発行

真野正順 著

新刊 日本人の信仰と生活

B 6 判 356 P
価 700円 〒70円

昭和のはじめの国家主義の嵐のなかにあつて真の日本人の在り方を示すため、仏教的ヒューマンズムをおしすすめ、また戦後の混乱期において、新しい日本人の精神生活に礎をあたえた筆者の、仏教者としての信仰と人生観のあふれる遺稿のかずかずをまとめた珠玉の随想録

内 容

第1章 香を焚く 第2章 生活を強く美しく
第3章 先聖行ける道 附 真野先生を偲びて

発行所 法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田橋1-11-6 振替東京 82187